

序

行政とは明治以降わが国が近代国家になってから国家の作用である立法・司法とともに三部門をなすものである。その定義については様々な学説がみられる。考えようによっては立法・司法以外の住民生活にかかわる事柄の全てが行政といえよう。従って行政は古代から現代に至るまでその時代によって、いろいろな形で人々の日常生活に大きく作用してきた。それだけに最も身近で、かつ地域に密着した問題であるため、地理学にとっては重要課題の一つと考えられる。かといって地理学体系では独立した一分野を構成しているわけでもない。強いていえば政治地理学のカテゴリーに入れるべき性質のものである。

昭和五〇年に刊行された『政治区画の歴史地理』は歴史地理学紀要第一七集として成果が公刊されたものであるが、その課題が示すように収録されている論稿の大半が国境・藩境・地方行政区画といった境界に関するもので占められた、いわば政治地理学の成果とみるべきである。

今回は第三〇回大会の共同課題「行政の歴史地理」を表題として編まれている。単に境界問題に止まらず広く行政地域の設定、市町村の広域化、町村合併などの範囲を含む研究対象となっている。その場合過去の空間現象を取り挙げてそれを認知しようとする歴史地理学にあつては国・藩・村のほか、明治初年の府県域など政治・行政の境界はもとより聖俗境界など境界域の問題のほか、時には絵図・地籍図を駆使しての近世所領地や知行地それに行政村、大区小区制の地域設定など多様な問題を含むのである。地理学のどの分野でもそうであるが、ことに此種の課題に関しては法制

史、行政学のほか、隣接諸科学との連繫があつてこそ成果が生まれるのである。その意味でも今後一層の隣接諸科学との交流が望まれる。それはともかく、これまで行政に関する個別成果は多くみられたものの、「行政」を中心課題として取り挙げられたことは地理学界の発展のためにも誠に慶賀すべきことである。

本書の特色を収録されている論稿でみると、まず時代別では古代より近代に至る各時代に及んでいること、中でも近代・近世のそれが多いことである。また課題別では所領、行政資料としての地方絵図、明治期町村制度による行政区域と町村合併、それに修験道聖域と行政などいづれも充実した論稿の集成で、しかも次代の歴史地理学界の担い手として期待される若手研究者の論稿の多いことも特徴である。

本書成るにあたって、本年も財団法人畠山文化財団から多額の助成金を頂戴した。記して深謝の意を表す。

昭和六十二年十二月